チョコレートキャッスル
2018年7月公演

KUSATSU ONSEN

決定稿

人　物

《高校同期》

清原潤　1994.6.23 生まれ。損害保険会社営業マン。
大学時代のめぐみの恋人。
現在は、秋尾市役所にサイバーリスク保険の営業を行っている。

神田竜一　1995.1.10 生まれ。今を時めく俳優「神原竜」。
中性的な雰囲気を纏う。
弟の瑛二が秋尾市役所に新卒で入り、めぐみに目をかけられる。

《市役所同期》

由比めぐみ　1994.10.7 生まれ。大学時代の清原の恋人。
神田（神原竜）の大ファン。
秋尾市役所町づくり部スポーツ課。
清原との失恋で、瑛二に気を持つ。

北原るり　1994.8.20 生まれ。神田の中学時代の友人。
家が金持ち、お嬢様。敬語を専ら用いる。
秋尾市役所健康福祉部総務課。

設　定

時は 2018.7。
清原　24 歳（社会人２年目）。
神田・めぐみ・るり　23 歳（神田以外、社会人２年目）。
清原・めぐみ・るりが新社会人になったのは、2016.4。

清原とめぐみの交際開始は、2014.12（約４年前）。
清原とめぐみの交際終了は、2018.3 下旬（交際期間約３年３カ月）。
清原とめぐみの同棲開始は、2017.5 上旬（交際開始から約２年半）。

めぐみが瑛二に介抱されたのは、2018.4 下旬。

☆舞台美術

センターに男湯と女湯を仕切る壁（以下「垣根」）。
上側、下側の奥に、それぞれ脱衣所からの出入り口を示すハケがある。

○開場中

神田のラジオ番組（『水曜日のカンバラ流』）がずっと流れている。

○開演

露天風呂を工事している音。

神田声　「そうか、瑛二にそんなことが」
るり声　「由比めぐみって言います」
神田声　「ぼくは何をすればいい？」
るり声　「この台本を、覚えてください」
神田声　「めちゃくちゃお金かかるでしょう」
るり声　「一石三鳥なんです」
神田声　「潤と」
るり声　「めぐみと」
神田声　「北原さんが救われる」
るり声　「財力です」
神田声　「一肌脱ぎましょう！　温泉だけに」
るり声　「以前、西麻布の焼肉でお話ししたときに」
神田声　「瑛二も隅に置けないねえ」
るり声　「でも、わたしの中のこの気持ちが」
神田声　「ぼくもあんまりそっちの方面は明るくないからなあ。それこそ、潤のことが参考になるのかもね」
るり声　「だから、その……共感していただけるか分からないのですが、大切な友人の恋が終わるのは、悲しいのです」
神田声　「うまくいくといいね」
るり声　「みんなで幸せになるために」

○清原と神田（夕飯前）

S、戸の開く音
神田、入って来る。

神田　「あ！　あ！　ああ！　腰に効くぅ～」

神田、掛け湯をする。

神田　「ああ、気持ちい」

神田、浴槽に入る。

神田　「あ、あああ（気持ちいい声）」

神田　「潤！　潤！」

神田　「潤！」

清原　「（指でシーッとしながら）わあってるよ！　そんな大声で呼ぶな！」

S、戸の開く音
清原、入って来る。

神田　「あ、ごめん」

清原　「なんかこの扉、人が死にそうな予感させるな」

神田　「うん？」

清原　「あ、別に。まあ死なないか」

清原、見回して

清原　「誰もいないの？」

神田　「うん」

清原　「ラッキー」

清原、掛け湯をせずそのまま入ろうとする。

神田　「ちょっとちょっとちょっと」

清原　「なに」

神田　「掛け湯しないと」
清原　「あー」
神田　「うん」
清原　「する？」
神田　「うん」
清原　「そっか」
神田　「マナーとして」
清原　「マナー」
神田　「うん」

清原、頷いて、掛け湯をする。
清原、浴槽に入る。

清原　「おお……（気持ちい声）熱っ！　よく入ってられるな」
神田　「そう？　ちょうどよくない？」
清原　「熱いわ」
神田　「慣れれば気持ちいよ」

清原、ゆっくり入湯。

清原　「ああ、たしかに気持ちいいなこれ」
神田　「でしょ」
清原　「あああ……疲れが取れる」
神田　「ね～」
清原　「あああ、気持ちいい」
神田　「ここね、ph2.1なんだって」
清原　「あ、温泉？」
神田　「そう。強めの酸性」
清原　「あ～。そうなの」
神田　「なに？　気になんないの？」
清原　「何が」
神田　「泉質とか、効能とか」
清原　「あんまり。気持ちよければ何でもいい」
神田　「源泉かけ流しなんだって」
清原　「へえ」
神田　「源泉はね、72℃あってね」

清原　「あん」
神田　「ほら、ホテルの前に湯畑ってあったじゃん？」
清原　「あ」
神田　「あっこで冷やしてるんだって！　入れるくらいの温度まで。神経痛・筋肉痛・関節痛・糖尿病、あと腰痛も。何でも効くみたいよ」
清原　「へえ」
神田　「恋の病以外なんでも治る、って書いてあったよ」
清原　「分かったよ！　マニアか」
神田　「マニアじゃないけど。一応」

神田　「あ、ねえ」
清原　「ん？」
神田　「なんで急に？」
清原　「ん？」
神田　「温泉」
清原　「あああ……なんか、懸賞で」
神田　「懸賞？」
清原　「だいぶ前で、おれも覚えてなかったんだけど、アプリのアンケートに答えてたっぽい」
神田　「なに、アンケートのアプリって」
清原　「逆、逆」
神田　「え？」
清原　「アプリの、アンケート。新しくインストールしたアプリとかだと、よくあるじゃん。これを使用した感想をお聞かせください、みたいな」
神田　「ああ、あるある」
清原　「それに答えたら、くれた」
神田　「旅行？」
清原　「ああ」
神田　「アンケートのお礼で旅行！？」
清原　「ね」
神田　「ホントに、『ね』だよ」
清原　「まあ、温泉来られてるんだから、細かいことはいいっしょ」
神田　「ええ……大丈夫？」
清原　「なにが」
神田　「あとで莫大な料金請求されたりしない？」
清原　「しないっしょ」

神田　「ほんと？」
清原　「されたら、おれがぼこぼこにしてやるよ。拳で」
神田　「誰を」
清原　「……さあ」
神田　「呑気だなあ」
清原　「それがおれのいいところなのでは」
神田　「それはそうかも」
清原　「だろ。まあ、今は気持ちいいから何でもいい～」
神田　「そうだね～」

神田　「最近仕事、忙しい？」
清原　「あ～、まあ、ぼちぼちなあ」

清原　「う～ん？」
神田　「生命保険の会社ってさあ、……何やってるの？」
清原　「あーね」
神田　「うん、ね」
清原　「分かんないよね、馴染みないし」
神田　「そう、そうなんだよ～。ほら、保険てさ、目に見えないじゃん」
清原　「まあ、そうだねえ」
神田　「だからますます、ねえ」
清原　「おれは、営業で」
神田　「そのさ、営業って何なの」
清原　「あん？」
神田　「いや、そのよくね、営業って聞くけどさ、営業ってなに？」

清原、少しバカにしたように笑って

清原　「芸能人～」
神田　「だって通って来なかったんだもん！　営業！」
清原　「通ってって」

清原　「営業。う～ん、分かりやすく言うと、売り込み？　自社の商品を、扱ってください！　っていう」
神田　「売り込みだ」
清原　「売り込みだって」

神田　「なにを。売り込むの」
清原　「新商品を」
神田　「どこに」
清原　「どこに。う～ん……個人もあるし、学校とか、企業とか、役所とか、官公庁とか、最近だとコンビニとか」
神田　「コンビニ？　おにぎりじゃん」
清原　「うん」
神田　「ツナマヨと、保険おにぎり、レジに持っていくの？」
清原　「1日から入れる自動車保険とか、レジャー保険とかさ。保険屋も頑張ってるのよ」
神田　「ほえええええ」
清原　「まあ、そういうのを売り込んでいるの、おれは」
神田　「そうなんだ……。なんかすごいね」
清原　「なんもすごくないよ」
神田　「う～ん」
清原　「リュウも、あれ、お疲れ」
神田　「あれ？」
清原　「ドラマ」
神田　「あ～！」
清・神　『東京レバニラ娘』
神田　「ああ、見てくれてるの？」
清原　「んん～、たまに」
神田　「ホント！？」
清原　「たまに」
神田　「えええ～～、いつの回見たの」
清原　「ええと」
神田　「今何話までオンエアされてる？」
清原　「さあ」
神田　「4話？　5話？　6話かなあ！」
清原　「知らん。おれが見たのは、秋田シルクポークじゃないか！　ってやつ」
神田　「秋田シルクポーク！　銘柄までよく覚えてるね！」
清原　「銘柄しか覚えてないけどな」
神田　「嬉しいなあ、嬉しいな。第3話だ」
清原　「喰いタンだよな」
神田　「ちょっと」

清原　「食っただけで豚の銘柄が分かるんだから」
神田　「そんな能力は喰いタンにはなかったでしょ」
清原　「♪ナポリタン～～（歌いだす。うろ覚え）」
神田　「覚えてないじゃん」
清原　「もうだいぶ前だから」
神田　「なんだよ、もう」

しばらくして、沈黙。

清原　「おれさ、別れた」
神田　「ん？」
清原　「別れたよ、彼女と」
神田　「え？　ん？」
清原　「覚えてる？」
神田　「うん……」

神田　「ごめん、誰だっけ」
清原　「めぐみ」
神田　「ああ！（ピンと来てない）」
清原　「由比めぐみ」
神田　「うんうん」

神田　「誰だっけ」
清原　「ええ！　全然覚えてねえじゃん！」
神田　「もうだいぶ前だから」
清原　「仕返し！」

清原　「ええ！　覚えてないの」
神田　「ごめん……台本は覚えられるんだけど」
清原　「３年付き合ってたんだが」
神田　「３年も前に聞いたこと、覚えていられないよ」
清原　「……確かに」
神田　「別れたんだ。３年も付き合ってた、めぐみさんと」
清原　「せやで」

なぜか見つめ合ってニヤニヤする清原と神田。

清原　「せいせいした！！（強がりである）」
神田　「え？」
清原　「せいせいしたわ！！（強がりである）」
神田　「ドユコト～」
清原　「せいせいしたんだわ！！」
神田　「強がり、強がり？」
清原　「違う！」
神田　「でも完全に強がりの言い方でしたよね」
清原　「二人でいると、だめになるわ！　うん」
神田　「……やっぱ言い方が強がってるよね」
清原　「おいコラ」
神田　「強がってる」
清原　「強がってんじゃなくてさ」
神田　「なに」
清原　「同棲してて、怒られるわけよ。細かいことで」
神田　「へえ……同棲してたんだ」
清原　「うん」
神田　「それで……？　細かいことって？」
清原　「……風呂入るじゃん」
神田　「うん」
清原　「排水溝に髪の毛とか溜まるじゃん」
神田　「溜まる」
清原　「それ取れって」
神田　「うん」
清原　「玄関上がったら、まず靴下は脱いで、とか」
神田　「ああ」
清原　「細かくね？」
神田　「でも分かる気もするなあ」
清原　「えええ」
神田　「一日靴の中に突っ込んでた足だからね……汚い足で中歩いて欲しくないってことじゃないかなあ」
清原　「はあ、あんま覚えてないけど」
神田　「えええ」
清原　「あとは、他の女の子見るな、とか」
神田　「うん？」

清原　「若くてきれいな子とか、ついつい見ちゃうじゃん？」
神田　「若くてきれいな子、家に連れ込んだの……？」
清原　「いや、海とかプール行くと」
神田　「はん！？」
清原　「海とかプール。いや、さすがに連れ込まないだろ！」
神田　「？？？」
清原　「どした」
神田　「だって同棲のときの話してたじゃん！」
清原　「ああ、そっか」
神田　「そうだよ～、もう～」
清原　「ああ、じゃあ、あれだ。うがいとか歯磨きした後は、一回水流せ、とか」
神田　「うん？」
清原　「歯磨きして、こうペッてすんじゃん。それっきりにしないで、流し、漱げって」
神田　「ええ、うん……（清原に少し引いている）」
清原　「あとは、え……えと、便器のフタは閉めてとか」
神田　「その通りじゃん！」
清原　「あん？」
神田　「その通りじゃん！」
清原　「あん？」
神田　「排水溝の毛は取って、歯磨きの後は水流して、便器のフタは閉めなよ！　あとプールとか海で他の子見ちゃだめだよ！」
清原　「あ、そっち派？」
神田　「え？」
清原　「あ、そっち派だ。親めぐみ派」
神田　「うん」
清原　「うんかよ」
神田　「だってめぐみさん、正しいもん」
清原　「ね」
神田　「うん？？？」
清原　「うん」
神田　「うん」
清原　「うむ」
神田　「え、親めぐみさん派？」
清原　「まあ、親かと言えば怪しいけど。分かるなあ、と思う」

神田　「え？　別れたんだよね？」
清原　「うん」
神田　「二人でいると、だめになるんだよね？」
清原　「そう」
神田　「そういうことに耐えられなくなったのではなくて？」
清原　「耐えられたんだよ、そういう細かいことには」
神田　「うん？？」
清原　「だからさあ、もっと大きいことにも耐えられるって思っちゃったんだろうなあ（黄昏る）」
神田　「あああああ」

神田　「や、黄昏たって分からないものは分からないからね！」
清原　「分からんか！　そうか、わからんか！」
神田　「なに、なんでちょっと嬉しそうなの！」

清原、立ち上がり、浴槽から出る。

神田　「ちょっと、どこ行くの」
清原　「あ、逆上せた……」

清原、ゆっくり倒れる。

神田　「潤！」

神田、急いで清原を介抱しに行く。

神田　「大丈夫！？」
清原　「うぅぅう」

神田、清原に手を貸して

神田　「潤、ほら……長湯しちゃったね、出ようね」
清原　「うぅう」
神田　「部屋戻ったらキンキンに冷えたビール飲もうね」
清原　「飲む！！」

S、戸の閉まる音

清原声　「ほら、やっぱり人の死ぬ音！」
神田声　「何言ってんの！」

清原と神田、ハケる。

〇めぐみとるり（夕飯前）

S、戸の開く音

めぐ声　「なにこれ、人死にそう」
るり声　「ですね……」
めぐ声　「まあ、死なないか」
るり声　「たぶん……」

めぐみとるり、入って来る。

めぐみ　「やばいやばいやばいなにこれなにこれ～～～」
るり　「うわ～すごいです！　絶景です！　映えますねこれ！　インスタグラムにあげていいでしょうか！」

るり、胸からスマホを取り出す。

めぐみ　「え、やばいあんた。え、なにスマホ持って来てんの！　ウケんだけど」
るり　「だって露天風呂ですよね？　映えますよ！　興奮です！　ほら、撮りますよ！　隠してください！　インスタに載せるんですから！」
めぐみ　「どんだけ興奮してんのよ、もう、どんだけ～～（ウザく）」
るり　「お友達と温泉なんて、初めてですもん。興奮します」

るり、インスタグラムのストーリーで撮影。

めぐみ　「あ、これもう撮ってる？」
るり　「はい！」

めぐみ、映り込む。隠したり隠さなかったり。

めぐみ　「は～～い　KUSATSU に来てます～いぇい（開く）」
るり　「（撮影）有休使ってお友達と来ちゃいました～～　KUSATSU 温泉です～初めてなので、だいぶはしゃいでます～」

めぐみも映り込む。

めぐみ　「いぇ～～い！　慰安旅行だぜ～～失恋してるぜ～ＴＴ～」
るり　「はっ！　そうでした、失恋……。忘れてました」
めぐみ　「でもそんなの関係ねえ！　はい、オッパッピー！」
るり　「オッパッピー、なんですか？」

るり、ストーリーの撮影、終わる。

めぐみ　「そんないつまでも落ち込んでたって、しょうがないじゃん」

めぐみ、るりのスマホを見て

めぐみ　「うわ、わたしぶっさ」
るり　「そんなことないですよ！」
めぐみ　「あ！！」
るり　「どうしたんですか」
めぐみ　「リュウのストーリー」
るり　「リュウ？」
めぐみ　「神原竜。KUSATSU 温泉来てるじゃん！」
るり　「あら、偶然ですね。そういえば、（神田竜一さんとは）」
めぐみ　「（遮って）え～、リュウも KUSATSU 温泉来てるんだ。この辺にいたりしてね」
るり　「まさか」

めぐみ、ツラまで出てきて

めぐみ　「お～い！　神原竜！　いるかあああああ！」

るり、慌ててめぐみを制止する。

るり　「（慌てて）ファンなんですか？　神原さんの」
めぐみ　「そらもう」
るり　「ドラマ、おもしろいですよね」
め・る　『東京レバニラ娘』」
めぐみ　「あ、るりも見てるの？」
るり　「はい、もちろん」
めぐみ　「へえ。なんか意外」
るり　「そうですか？」
めぐみ　「お嬢様だから、そういう俗世には興味ないんだと」
るり　「わたしだってドラマくらいは見ますよ」
めぐみ　「お嬢様は否定しないんだな」
るり　「（聞いてない）おもしろいですもん」
めぐみ　「ね！　全話２回ずつ見てるよ」
るり　「めちゃくちゃハマってるじゃないですか」
めぐみ　「だから好きなんだって、リュウ。セリフも覚えてるよ。こ、『これは福島の麓山高原豚（はやまこうげんとん）……ですよね？』『そ、それは』『どうして長野県産なんて』」
るり　「ほええ」
めぐみ　「第５話ね」
るり　「そうなんですねえ（少し引いてる）」
めぐみ　「ごめん、もうさっさと入ろう」
るり　「はい、そう致しましょう」
めぐみ　「掛け湯しなきゃだよね」
るり　「そうですよね」
めぐみ　「え、てか掛け湯どこ」
るり　「さあ」
めぐみ　「え、待って、掛け湯ないとかウケんだけど」
るり　「あ、あっちですかね」

めぐみとるり、騒がしくハケて掛け湯する。

めぐ声　「え、あんたよく見たらすごい綺麗な肌ね」
るり声　「そんな……恥ずかしいです。……そんなにじっと見つめないでください！」
めぐ声　「綺麗だわ～～（触る）」

るり声　「はぅぁわわああぁわわ！　ちょっと、へっへんなところ触らないで」
めぐ声　「変な声出さないでよ」
るり声　「めぐみがへ、変なところ触るから」
めぐ声　「変なところって？　どこ？」
るり声　「それは……」
めぐ声　「どこよ～　言ってみなよ」
るり声　「は、は、破廉恥です！」

めぐみ、出てくる。

めぐ　「温泉の醍醐味じゃな！　HAHAHA」
めぐみ　「入ってるよ～」
るり声　「わたしも入ります！」

るりも出てくる。
めぐみ、浴槽に入る。だいぶ熱い。

めぐみ　「あっつい」
るり　「え、そうですか？」

めぐみ、熱くてちょっと躊躇う。
るり、どぼどぼ入る。

めぐみ　「熱くない？」
るり　「ちょうどいいです」
めぐみ　「え～～～」
るり　「大丈夫ですよ。慣れれば慣れます」
めぐみ　「そんなこと言ったって」

めぐみ、ゆっくり入る。

めぐみ　「手貸して」
るり　「そんなに熱いですか」

るり、めぐみに手を貸す。

めぐみ「ちょっと、引っ張らないでね。ゆっくり入るから」
るり「はい、大丈夫ですよ。ゆっくり入ってください」
めぐみ「絶対に引っ張らないでね！　本当に熱いから」
るり「はい、引っ張りません！」
めぐみ「マジで引っ張らないでね」

めぐみ、恐る恐る入る。

るり「はい！」
めぐみ「おおおおお、熱い～……あーでも。気持ちいい」
るり「ね！　気持ちいですよね？」
めぐみ「あーーこれ、あ、これ。慣れれば慣れるねえ」
るり「気持ちいいですね」
めぐみ「あ～～～最高だね」
るり「日々の疲れが取れますね～」
めぐみ「ってか、スマホスマホ！」
るり「あ、これ完全ウォータープルーフなんです」
めぐみ「まじ？　え、それでも」
るり「大胆すぎない！？」
めぐみ「大丈夫ですって、完全ウォータープルーフなんで」
るり「完プル」
めぐみ「家のお風呂でも、よくこうやって撮ってましたし」
るり「まじで！？」
めぐみ「はい。見ます？」
るり「なにを」
めぐみ「（スマホを操作して）これ、うちのお風呂で撮った写真です」
るり「（覗いて）ああ、ああ。あ、あんた、お風呂から足だけ浮かせた写真撮ってインスタに載せちゃう系だ」
めぐみ「はい」
るり「ってか風呂広っ！　家か！」
めぐみ「そんなに広いですかね？」
るり「広いよ！　これ何回か言ってるけど、るりんち、広いからね！？」
めぐみ「はあ、そうなんでしょうかね。ほかの方のお宅にお邪魔したことがないので」
るり「うっそ、ないの？」

るり「はい」
めぐみ「誰も？」
るり「はい！」
めぐみ「はあ……珍しい～」
るり「そうですか？」

るり、足を浮かせてスマホで撮影する。

めぐみ「あのさ、ここお風呂じゃん？」
るり「はい、お風呂ですね」
めぐみ「前、潤と」
るり「潤」
めぐみ「元カレね……」
るり「元カレさん！」
めぐみ「うん」
るり「そうでした、今日はそのために来たんでした」
めぐみ「そのためって」
るり「めぐみの慰安です！　さあ、わたしになんでも話してください！」
めぐみ「話す……話すって、何を」
るり「元カレさんとの思い出です」
めぐみ「どうしたの、急に……」
るり「話すと楽になるって、聞いたことがあります」
めぐみ「ええ、別に」
るり「わたし、聞きますから！」
めぐみ「はあ」
るり「ですから、遠慮しないでくださいね！　全てを受け止めます」
めぐみ「なんか、調子狂うなあ」
るり「狂わないでください！」
めぐみ「……まあ、じゃあ元カレと、ユネッサン行ったときに」
るり「ユネッサン？」
めぐみ「ユネッサン。え、知らない？」
るり「なんですか、それ」
めぐみ「入浴施設。温泉というか、大きいスーパー銭湯みたいな」
るり「存じませんでした。どちらにあるのでしょうか」
めぐみ「箱根」
るり「箱根！　いいですねえ」

めぐみ「で、まあそのユネッサンに行って。わたしの21歳の誕生日に」
るり「誕生日の記念に！」
めぐみ「ユネッサンは水着で入るの」
るり「！　そうなんですね。男女は、別々ですよね」
めぐみ「いや、一緒に」
るり「えっ。そんなはしたない」
めぐみ「はしたなくないよ！」
るり「ええっ」
めぐみ「それで潤がね、他の女の胸を体を顔を足を、こうチラチラチラチラ見るのよ！」
るり「まあ」
めぐみ「で、『ちょっと、イヤラシイ視線向けないで』って言ったらさ」
るり「やっぱりはしたない……」
めぐみ「（無視して）『いや、19歳がやっぱり女盛りだから』って」
るり「ど、どういうことでしょうか」
めぐみ「そう、意味わかんないじゃん！　わたし21になってるんですけど！」
るり「そうですね……受け答えとして支離滅裂な気がします」
めぐみ「でしょ？　だからさ、『わたし21だよ』って言ったの」
るり「それで」
めぐみ「『だから、めぐみは19みたいに可愛いよ』って」
るり「？？？　どういうことでしょうか」
めぐみ「全然意味分からない」
るり「はい」
めぐみ「こういう細かいことほどずっと忘れないと思う」
るり「ほかにもあるのですか？」
めぐみ「うん。同棲してるときもさあ、何回言ってもお風呂の毛を取らなくてさあ」
るり「お風呂の毛、というのは？」
めぐみ「排水溝に、溜まるじゃん」
るり「ああ、抜けた毛ですね」
めぐみ「髪の毛とか脛毛とか陰毛とかが」
るり「インモウ！」
めぐみ「ちょっと繰り返さないでよ。中学生か」
るり「ああ、ごめんなさい、突然で」
めぐみ「排水溝に毛を貯めないで欲しいのよ」
るり「はあ」

めぐみ「お風呂出るときに、貯めないで必ず取ってほしいの！」
るり「なるほど」
めぐみ「でもさあ、アイツは貯めるのよ、毛を。排水溝に」
るり「いやだったのですね？」
めぐみ「いやでしょ！　なんでアイツの毛を見ながらシャワー浴びないといけないのよ。きったない」
るり「辛辣です！」
めぐみ「あと、わたしは、帰ってきたらすぐ靴下脱いでほしいの」
るり「ど、どうしてですか！」
めぐみ「きったないじゃん！　一日靴の中に突っ込んでた足でさあ、家の中歩いて欲しくないんだよねえ。汚い」
るり「お付き合いしている方でも、そう思うのですね」
めぐみ「全然思うよ。思わん？」
るり「え、わたしですか！」
めぐみ「うん」
るり「わたしは、その、恋とかよく分からないので」
めぐみ「え？」
るり「はい」
めぐみ「彼氏は？」
るり「あ～……い、いたことないです」
めぐみ「……そっかそっか」
るり「はい。同棲、大変そうですね」
めぐみ「う～ん、アイツはさ、生活を共有してるってことを分かってなかったんだと思うんだよ」
るり「でも、生活習慣を合わせるって難しいことじゃないですか？」
めぐみ「いや、それは意外にできるんだ」
るり「そうなのですか」
めぐみ「それよりも、生活の大きいところが合わなくなってきてさ」
るり「大きいところ、ですか」
めぐみ「わたしは……一緒に生活していても付き合いたての恋人みたいにしていたかったんだよ。見つめ合ってチュってしたり、何とはなしにギュッてしたり」
るり「できるじゃないですか。同棲なさって（いたんですから）」
めぐみ「してこないんだよ！　あっちが！　そんなこと！」
るり「おお」
めぐみ「好きな人が、なんにもしてこないでただそこにいるだけの日々」

るり　「好きな人がそこにいるだけの日々……」
めぐみ　「なんかもう、自分もアイツのこと好きなのか分からなくなってきちゃったよね」
るり　「それは、どうして（ですか）」
めぐみ　「同棲してるから、肉体的な生活の距離は縮まったのに、精神的な生活の距離はどんどん開いていった感じがする」
るり　「精神的な距離？」
めぐみ　「全部一人でやっちゃうんだよ、アイツ。食事も、外出も、寝るのも、お風呂も」
るり　「あああ……」
めぐみ　「わたしって、なに……ってなってさ。自分が発信する『好き』が見事に全部スルーされるから」

めぐみ　「好きでいることに麻痺しちゃう」
るり　「えええ……そうなんですか？　好きな人がずっといて、嬉しくないですか？　安心したり」
めぐみ　「最初はね。もう幸福に満ち満ちてるよ！　めちゃくちゃハッピー！1～2か月はね」
るり　「1～2か月」
めぐみ　「その後は、お互い相手の生活に合わせていくようになる」
るり　「さっき仰っていた、排水溝に溜まった毛を取ったり、玄関を上がってすぐ靴下を脱いだり、ということでしょうか」
めぐみ　「そうそう。でも、それはクリアできて。問題はその後」
るり　「その後」

るり　「好きという感覚に、麻痺しちゃうんですよね」
めぐみ　「あれ、わたし本当に好きなのかな、潤のこと？　って」
るり　「同棲って、そんなに切ないのですか……」
めぐみ　「わたしは……そうだった」
るり　「それでも、1年くらい続いたのですよね？」
めぐみ　「なんかもう意地と見栄だったね、わたしは」
るり　「少し、寂しいですね」
めぐみ　「るりが？」
るり　「はい」
めぐみ　「なんでよ」
るり　「ときめきが褪せてしまうから」

めぐみ、笑う。

るり　「あ！　なんで笑うんですか！」
めぐみ　「そんな宝石みたいなものじゃないよ、生活って」
るり　「そうですか？」
めぐみ　「そりゃ、そうでしょ」
るり　「それでもやっぱり……」
めぐみ　「なに」
るり　「めぐみが、めぐみの恋が終わってしまうのは、わたしは悲しいです」
めぐみ　「……そっか。ありがとう」
るり　「はい」

めぐみ　「わたしもさ、好きで嫌いになったんじゃないんだよ。もう一回、好きになりてえよ。好きになってもらいてえよ……まだまだ好きになれたよ。同棲さえなければ」
るり　「好きになれますか？」
めぐみ　「え？」
るり　「もう一度元カレさんとお会いすれば、好きになれますか？」
めぐみ　「……なれる」
るり　「ホントですか！」
めぐみ　「たぶん」
るり　「先程までユネッサンや排水溝のことで怒っていましたが」
めぐみ　「ミクロだとね、そういう細かい文句はあるよ！　でもさあ、マクロで見るとさあ、雰囲気とか安心感とか、なんかもう、……ふわっと、ふわっと、好きなんだろうなあ、わたし。うん」
るり　「大好きなんじゃないですか」

るり、一人で笑って

るり　「ミクロとマクロって、経済学みたいですね」

L、暗転

○４人（夕飯後）

S、戸の開く音
神田と清原が来る。

神田　「美味しかったねえ」
清原声　「久しぶりにあんなに食った」
神田　「ね！」

神田、掛け湯して浴槽に入る。
清原、掛け湯をせずに入ろうとする。

神田　「あ」

清原、神田を見る。

神田　「せめて掛け湯くらい」
清原　「分かったよ」

清原、掛け湯しにハケる。
神田、清原を監視する。

清原　「なんだよ」
神田　「見てるだけだよ」

神田　「（満足げに）そうそう」
清原　「細かい」
神田　「マナーだから」
清原　「まーな」

神田、清原を全力で振り返る。腰が痛む。
清原、戻って来る。

清原　「あ？」
神田　「なんでもない」

清原、浴槽に入る。

清原　「あ～（気持ちいい）」

清原　「あ～。さっきより熱くね？」
神田　「そう？」
清原　「あ～」
神田　「いいねえ、夜のお風呂も。星が、綺麗だ」
清原　「どうなの」
神田　「？」
清原　「最近」
神田　「最近」

神田　「瑛二がね」
清原　「エイジ？」
神田　「弟」
清原　「ああ、そうだ」
神田　「社会人になったんだけど、先輩に……好かれてるんだって」
清原　「はん？　なにそれ」
神田　「先輩に、好かれてるの」
清原　「モテモテじゃん」
神田　「違うんだよ～」
清原　「好かれてるって」
神田　「新入社員？の歓迎会で、その先輩がべろんべろんに酔って吐いちゃったんだって」
清原　「新入社員の歓迎会だよな？」
神田　「そう」
清原　「先輩が吐いちゃったのかよ」
神田　「そう。瑛二がそれで介抱したら、懐かれて」
清原　「介抱って？」
神田　「家まで送って行ったの。べろんべろんだったから」
清原　「瑛二いいやつ～」
神田　「したら、家で、急に……チューされて」

神田　「チューされて」
清原　「チューされて？」
神田　「チューされて、それ以降、好かれてるって」
清原　「すごいな瑛二！」

S、戸の開く音
めぐみとるりが入って来る。
るりが笑っている。

めぐみ「効能～。恋の病には効かないって書いてあったねえ」
るり「ありましたねえ」
めぐみ「ウケる。もうダメじゃんわたし！　でもそんなの関係ねえ！
るり「そんなことありませんよ！」
めぐみ「まあいいや。でさあ、4年付き合ってよ、1年間は同棲してたのに別れてさあ、永続的な愛なんか信じられなくなっちゃったからねえ」
るり「勉強になります」
めぐみ「勉強になんないよ。酔っぱらった挙句に新入社員に介抱されて」
るり「めぐみ、見事な介抱されっぷりでしたよ」
めぐみ「やだもう～。本当にお恥ずかしい……」
るり「しかもおうちで、チュ、チューまで」
めぐみ「ぎゃあああ！」
るり「やっぱり、後悔しているのですか？」
めぐみ「後悔？　や、え、う～ん。酔いと一時の寂しさに負けた感じはある」
るり「ど、ど、どうでしたか」
めぐみ「何が」
るり「その、チューは」
めぐみ「酔ってたからねえ……あまり覚えてないよ～」

めぐみ、るり、浴槽に入る。

めぐみ「あっつい！」
るり「大丈夫ですか」
めぐみ「酔いぶっ飛んだわ～」

清原「それでどうするの、弟。付き合っちゃうの」
神田「いや～　ないんじゃない？　彼女いるし」
清原「なんだよ、じゃあチューしちゃだめじゃん」
神田「いやいや、瑛二からはしてないんだよ」
清原「あっちからしてきたの！？」
神田「うん、そう」

清原　「すげえな。新人の歓迎会で、酔って、後輩に送ってもらって、んでキスまでするって、どんな女だよ！」
神田　「やっぱりすごいよねえ」
清原　「心の闇が深そうだな」
神田　「女の人、振られた直後だったみたいよ」
清原　「そりゃあ、そんな女！　振られるよ」
神田　「でもまあ、酔ってたのもあるし」
清原　「告白とかはされてないだろうな」
神田　「されたって」
清原　「え」
神田　「された」
清原　「でも、彼女いるって」
神田　「うん。だから、その人には悪いけど、付き合えないんだよねえ」
清原　「じゃあ、断ったんだ」
神田　「それが、まだらしく」
清原　「え、なぜ」
神田　「なんか、告白して逃げたらしい」
清原　「うわああ」
神田　「でもちゃんと断りたいから、いつもタイミングを窺ってるって」
るり　「チューをした、ということはその方とお付き合いするのでしょうか？」
めぐみ　「え！？　なんで！」
るり　「え！　だって、チューされてるわけですから」
めぐみ　「チューしたら付き合うの！？」
るり　「違うんですか！」
めぐみ　「純粋！　純粋だ」
るり　「好きじゃないのですか、その方のこと」
めぐみ　「ええ～」
めぐみ　「まあ好きか嫌いかで言えば、好きではあるけど」
るり　「（マイクに擬した手をめぐみに近づける）なら、お付き合いの可能性もあるのですか」
めぐみ　「文春のリポーターか」
るり　「告白なんかも」
めぐみ　「神田くん、優しいからね！　みんなに優しいから！」

るり　「そういうところが好きなのですか？」
めぐみ　「潤にはないタイプの優しさよねえ」
るり　「それで、告白は」
めぐみ　「……たぶん、した」
るり　「えええ！」
めぐみ　「声が大きい！」
るり　「あ、申し訳ないです」

るり　「それでその……お付き合いできるんでしょうか」
めぐみ　「う～ん、それは分からないけど……。もしかしたらできるかも」
るり　「なぜそう思うのですか」
めぐみ　「いつもちらちらわたしの方窺ってる気配がしてさあ。これって、わたしのこと気にしてるってことじゃないのかなあ」

清原、女湯の方を見て

神田　「すごい叫んでたね」
清原　「あ、あっちにも人来たっぽいな」
神田　「初めて人の気配感じたね」
清原　「心配だったわ」
神田　「ぼくたちしかいないんじゃないかって？」
清原　「そうそう、いくらオフシーズンとは言え」
神田　「安心したね」
清原　「安心（？）」
神田　「ぼくたちだけじゃなくて！」

めぐみ、男湯の方を見て

めぐみ　「人、いるね」
★るり　「そうですねえ。わたしたちだけだと思ってましたもんね」
めぐみ　「わたしたちだけらしいよ」
るり　「え」
めぐみ　「さっき仲居さんが言ってた。今日は2組だけなんですよ～」
るり　「2組！？？」
めぐみ　「うん」
るり　「部屋数100くらいあって、2組なんですか！？」

めぐみ　「そうです、これで全部です」

★清原　「声、若いな」

神田　「うん、そんな感じするね」

清原、女湯の方に寄り、垣根を検分する。

神田　「潤？」

清原　「シッ（ポーズ）」

るり　「あの、差し出がましいようですが」

めぐみ　「うん、なに」

るり　「潤さんと、ヨリを戻されてはどうでしょうか」

めぐみ　「突然どうしたの」

清原、神田を手招きする。

神田　「え、なになになに」

神田、清原の方へ。

清原、神田に（肩車して）の指示。

神田　「ええ！」

清原、ジェスチャーで（覗くぞ）の指示。

神田　「中学生じゃん！」

るり　「寂しさと酔った勢いで後輩にチューすることから始まる恋なんて、めぐみにはしてほしくありません」

めぐみ　「えええ」

るり　「さっきだって、潤さんのことが好きだって言ってたじゃないですか」

神田、何やかんやで清原を肩車し始める。

神田　「おっ、意外と……」

清原　「しっかりしっかり。ばか、いきなり立ち上がったら見えちゃうだろ」

清原、神田の頭を押さえつける。
神田が立ち上がると、清原の頭が垣根を越してしまう。
神田はやむを得ず中腰。

神田　「いててて。ちょっと、強いよ。酔いすぎじゃない？」
清原　「酔ってねえよ！」

るり　「3年間付き合ったんです。それで分かり合えないなんて、悲しすぎます」
めぐみ　「しょうがないんだよ」
るり　「でも、好きなんですよね、潤さんのこと」
めぐみ　「……目の前にいたら、好きって思っちゃうかもなあ」
るり　「それは好きということではないでしょうか」
めぐみ　「暴論だろ！　だいたい、いないだろうが！」

神田、姿勢が辛いので立ち上がろうとする。

清原　「立ち上がったら、見えちゃうだろう！」
神田　「腰が、限界……」

神田、立ち上がる。

神田　「あああああああ！！！」
るり　「（清原を視認して）きゃあああああああ！！！」

清原、真ん中の垣根に手をつく。
女湯に、清原の顔が現れる。

るり　「めぐみあそこに変態がいます。めぐみあそこに変態がいます。めぐみあそこに変態がいます……」

めぐみ、清原と目が合い、固まる。

神田　「ちょ、ちょっと！　潤！　潤！」

清原も固まっている。

清原　「よっ！　久しぶり」

清原　「相変わらず良いカラダしてんな（口笛）」

めぐみ　「いる……（小声）。いる！！」

るり　「え」

めぐみ　「元カレ、いる！！！！」

神田　「え、元カレ？　潤、ちょと」

清原　「ってか、北原！」

神田　「ちょっと、そろそろ足腰が」

神田、バランスを崩す。

るり　「清原さん！」

めぐみ　「知り合い！？」

神田　「おっ」

清原　「おっ！」

神田　「あああああ！」

清原　「バランスが！」

神田　「崩れて！」

めぐみ　「え、ちょっと！」

るり　「大丈夫ですか！」

神田　「潤！　潤！」

清原　「あああああ！」

神田　「潤！　潤！」

神田と清原、組体操の「サボテン」の形を成す。

清原　「なんだこれ！」

神田　「バランスが！」

清原　「下ろせ下ろせ！」

清原、飛び降りる。
S、バシャーン

めぐみ　「ちょっと！　大丈夫！？」

めぐみ、垣根に駆け寄る。

るり　「どうしてここに」
めぐみ　「え？」
るり　「（男湯に）どうしていらっしゃるのですか！」
めぐみ　「そう、そう！　潤！　ってか、なんで知ってるのよ」
るり　「ではなくて！　……神田竜一くん！」

神田　「だよね！」
潤　「え」

めぐみ　「なに、え、え、誰？」
るり　「俳優の……神原竜さんです」
めぐみ　「え！？！」

神田　「るり、さんだよね。北原るりさん」
るり　「そう、そうです」
清原　「え、うそ……おまえら知り合い？」
めぐみ　「なんで神原竜とるりが」
神田　「うん」
るり　「なんでって」
★神田　「中学校の同級生だよ」
★るり　「中学校の同級生です」

★清原　「えええええええ」
★めぐみ「えええええええ」

L、暗転

○めぐみと清原と神田（翌朝）

男女、風呂が入れ替わっている。
神田と清原が（板付きで）浴槽に入っている。

神田　「北原さんは中学の同級生でね、なんか、親がすごいところのすごい人ですごい偉くて、家もすごい広くてさあ、お金すごい持ってるの」
清原　「……え、情報なっ！」
神田　「え？」
清原　「金持ちって言うことしか分からなかった」
神田　「でも、だいたい合ってるよ」
清原　「あそう」
神田　「中学ンときもね……修学旅行、現地に来てたし。ジェットで」
清原　「ジェット？」
神田　「オーストラリアに」
清原　「は、現地に？　オーストラリアにジェットで？」
神田　「うん」
清原　「……スネ夫かよ」
神田　「しかもオーストラリアで買った（お土産が）」

S、戸の開く音
めぐみが入って来る。
清原と神田、戸の開く音で気が付く。

神田　「あ」
清原　「来た」

清原　「誰だろう」
神田　「うーん」
清原　「めぐみだったらどうすんだよ」
神田　「どうするって……話せばいいんじゃない」

清原　「イヤだよ。上がるよ」

めぐみ、男湯の気配を感じる。

めぐみ　「潤？」

清原、（あちゃー）のリアクション。

清原　「（小声で）おれは上がるから、いないって」

清原、ゆっくり浴槽から出ていく。

神田　「えーと……神田です」
めぐみ　「あ、神原竜さんですよね」
神田　「あ、そうです、一応」
めぐみ　「一応ってそんな。あ、ドラマ、見てます」
神田　「あ、ありがとうございます！　『東京レバニラ娘』」
めぐみ　「はい」
神田　「ああ、嬉しい」
めぐみ　「あの、カン……バラ」
神田　「ああ、神田で、良いですよ」
めぐみ　「神田さん」
神田　「はい」
めぐみ　「潤はいますか」

清原、去りながら（いない　いない　いない）のジェスチャーを神田に送る。

神田　「います」
清原　「おい！」
清原　「おまえ、なんで」
神田　「チャンスだから」
清原　「チャンス？」
神田　「お願い」
清原　「うそだろ」
神田　「だって、こんな偶然ある？　めぐみさんは、潤にずっと会いたかっ

たんだよ、話がしたかったんだよ」
清原　「なんでそんなことリュウに」
めぐみ　「そうだよ！」

めぐみ　「話、したかった！　話したいこと、たくさんある！」
清原、面倒くさそうな顔。

神田　「だって」
清原　「おれはそんなことなかったぞ！」
めぐみ　「わたし……あんたに聞いて欲しいことがあって」
清原　「おれに？」
めぐみ　「うん。だから聞いて！」
神田　「あの……これぼく、いないほうが」
めぐみ　「いて。いてください」
神田　「あ、はい」
清原　「これ、おれもいた方がいいの？」
めぐみ　「おまえはいろよ」
清原　「ういっす」

めぐみ、元気玉の元気を集める。そして深呼吸する。

めぐみ　「わたしには今、好きな人がいます」
神・清　「えっ！」

神田、清原を見る。

清原　「なんだよ」
神田　「いいの？」
清原　「なにが」
神田　「めぐみさん、好きな人がいるって」
清原　「いいよ！」
めぐみ　「わたしは、その人のことは好きではありません」
清原　「（神田に）言ってることがめちゃくちゃだ」
めぐみ　「今、こうして、潤の声を聞いていると、なんか色んな感情が溢れ出しそうです」

清原　「（神田に）メンヘラだ」

神田、清原に（しーっ）のジェスチャー。

神田　「めぐみさん、あの、会いますか？」
清原　「は！？」
神田　「あとでめぐみさんと北原さんの部屋に伺うとか」
めぐみ　「や、それは」
清原　「おれは絶対行かねえぞ」
めぐみ　「やだやだやだ。わたしも顔を見て話すのは、……恥ずかしい」
神田　「（残念そうに）そうですか」
めぐみ　「露天風呂という、顔が見えない素っ裸な状況。素晴らしいです、ありがとう」
清原　「何への感謝だ」
めぐみ　「このまま本題に入ります」
清原　「もうお好きにどうぞ」

めぐみ、深呼吸。

めぐみ　「どうして、一緒にご飯を食べてくれなかったんですか。どうして、休日になると、一人で出かけちゃったんですか。どうして、先に一人で寝ちゃったんですか」

めぐみ　「わたしはそんなに、だめな女でしたか」

めぐみ　「いま素っ裸でしょ？　裸な気持ちで、答えてください」

清原、溜息。

清原　「生活の細かいところは、いいんだよ。直せるから」
めぐみ　「うん」
清原　「そういう髪の毛を取って、とか、靴下はすぐ脱いで、とか」
めぐみ　「うん」
清原　「でもさ、注文が、『一人で●●しないで』……『一人でご飯食べないで』『一人で出かけないで』『一人で寝ないで』になるとさあ、それはもう」

めぐみ　「束縛？」

清原、首を振る。

清原　「侵略だよ」
めぐみ　「え？」
清原　「他人の文化の、侵略」

清原　「いや、大袈裟じゃなくてね」

清原　「好きだったよ」
めぐみ　「だよね」
清原　「でも好きって変わるから」
めぐみ　「だね」
清原　「生活するのは、別に良かったけどさ。う～ん、なんだろ。家出、ってしたくなることあるじゃん、本当の家族でも」
めぐみ　「まあ、わたしはしたことないけど。『こんな家族嫌だ～！』って気持ちは、あったことはある」
清原　「それですよ」
めぐみ　「……どれ」
清原　「本当の家族ですら家出したくなるんだから、況や、恋人をや、じゃないですか？」
めぐみ　「う～ん？」
清原　「で、家族ほどバインドは強くないから、家出から戻ってこない」
めぐみ　「それ、チョー寂しいじゃん。言ってて寂しくない？」
清原　「でも……事実だから」
めぐみ　「え、え～～……。それもう無理じゃん」
清原　「だから無理だったんだよ」
めぐみ　「生活してただけだよ」
清原　「おれにはだれかと一緒になるのは、時期尚早だったのかな」
めぐみ　「そんな、四六時中一緒だったみたいな」
清原　「四六時中一緒だったんだよ」
めぐみ　「ええ？　四六時中一緒のわけないでしょ」
清原　「四六時中一緒だったんだって」
めぐみ　「何言ってるか分からないんだけど」
清原　「職場も」

めぐみ　「職場は違うじゃん！　わたしは秋尾市役所で！　潤は保険営業でしょ」
清原　「うん、だからさ」
神田　「あっ」
清原　「一緒だったんだよ、職場」
神田　「もしかして潤は」

M

めぐみ　「え、え、なに？！」

○ネタバレ

S、戸の開く音
るり、旅館の和装で女湯に現れる。

るり　「はいはい、どうも、皆さん、お世話様でございます」
★めぐみ「は？　なに？　なに！」
★神田　「北原さん！？」
清原　「どういうこと！」
るり　「どうもよしなに……。神田くん」
るり　「お気付きなのでしょう？」
めぐみ「気付いてるって」
るり　「気付いていらっしゃいますよね？」
めぐみ「（るりに）なに？　（神田に）なに！」
神田　「潤と、北原さんは」

るり、手を叩く。
真ん中の垣根が開く。

神田　「えええ！」
めぐみ「えええ！」
清原　「えええ！」

3人　「開くのおお！？」
るり　「開きます」

3人、慌てる。

めぐみ　「はあ！？？　うそうそうそうそうそうそうそ（身を隠す）」
るり　「開きますよ」

清原とめぐみ、目が合う。

るり　「（どや顔で）はいっ！」

清原　「あ、ども」
めぐみ　「ども」
清原　「どもども」
めぐみ　「どもでーす」
神田　「（るりに）どうもご無沙汰してます」
るり　「こちらこそ～」
めぐみ　「（るりに）ってか、二人の繋がりが未だに分からないけどオホホ」
清原　「まあ、おいおい」
神田　「（めぐみに）あ、どうもお会いするのは初めまして」
めぐみ　「潤がいつもお世話に」

清原　「とか言ってる場合か！　（るりに）北原、どうなってんのこれ！」
めぐみ　「ほら」
清原　「北原！」
めぐみ　「（全体に）どういうことこれ」
るり　「どういうこともこういうことも、こういうことですよ」
めぐみ　「はあ？」
るり　「（めぐみ）ふたりが、お望みになったことでしょう？」
めぐみ　「ふたりって」
清原　「おれ！？」
るり　「おれ、ですよね？」
神田　「ドユコト」
るり　「説明申し上げます！」
神田　「ねえ二人！　二人！」

清原とめぐみ、顔を合わせる。

神田　「いや違くて違くて！」

神田　「二人！（清原とるりを指す）」
めぐみ　「そそそそそ！　そう！（清原とるりを指す）」
清原　「なに」
神田　「潤と、北原さんは」
めぐみ　「そう！　それ！」
るり　「友人ですよ」
めぐみ　「え」
るり　「友人ですよね（清原に）」
清原　「うん。知り合い」
めぐみ　「はああ？」
神田　「ドユコト」
るり　「職場で知り合いましたの」
めぐみ　「……は？」
るり　「職場で」
めぐみ　「……ちょっと意味が分からないんですが。なに、どうゆうこと」
清原　「おれも、おたくの秋尾市役所に通ってたのであるよ」
めぐみ　「は？？？」
るり　「清原さんは、営業でウチの部に来ていたんです」
めぐみ　「えっ……。えっ……。マジで？」

めぐみ　「（清原に）マジで？」

清原、頷く。

めぐみ　「うそ……いつから」
清原　「８か月くらい前……からかな」
めぐみ　「ええ……」
神田　「そのこと、めぐみさんには言わなかったんだね？」
清原　「うん」
神田　「どうして」
清原　「一緒に住んでたから。一緒に住んでたから、仕事でまで、（言葉を濁

して）ねえ？」
神田　「なんで、北原さんと知り合ったの」
清原　「だから、営業で行ってて」
神田　「知ってるよ」
清原　「サイバーリスク保険ってのを扱ってて、それを、企業だけじゃなくって官公庁にも……なんて話はいいか。まあ、秋尾市役所に営業で行ってて、その窓口だったのが」
るり　「総務課のわたしだったんです」
めぐみ　「まじかーーーーー」
るり　「めぐみ」

るり、男湯を大きく指して

るり　「清原さん」

るり、清原の方に行き

るり　「清原さん」

るり、女湯を大きく指して

るり　「めぐみです」
神田　「ん？」
るり　「お二人が望んだ結果ですよね」

清原　「いやいやいやいや、望んでない望んでない」
めぐみ　「待って待って、そんなわたし会いたいなんて、会いたいだなんて」
るり　「どうして二人してこの期に及んでそんな嘘を」
清原　「いやいやいや、嘘ちゃいますよ！　おれはべつに、会いたくなんて」
めぐみ　「そうそうそう、別にもう終わたことだし、今さらこんな」
るり　「嘘言わないでください！」
神田　「さっき潤、せいせいしたって」
清原　「そうだよ、せいせいしたんだよおれは。だから、なんだよこれ。北原が、え、なんでこんなこと」
るり　「後悔してたじゃないですか、清原さん」
清原　「は～～～ん。なんだよ！」

るり　「仰ってたじゃないですか」
めぐみ　「え！　いつよ」
るり　「西麻布の焼肉で、『後悔してる』って」
清原　「言うそれ！」
るり　「めぐみ、思う存分、話してくださいね！」
めぐみ　「ええええええええええ」
清原　「無理無理無理無理！」
るり　「無理無理無理？　じゃないですよ！」
清原　「ええええええええええ」
るり　「わたしは、めぐみに悩んだり落ち込んだり、自分の気持ち誤魔化してたりしてほしくなくて、ですから、こうやって。財力で」
めぐみ　「財力！」
るり　「財力で、この旅館を貸し切ったんです。垣根も改造して」
清原　「まじかよ」
るり　「はい」

るり　「清原さんも、アプリで誘き寄せたんです」
清原　「誘き寄せたって言っちゃったよ」
神田　「やっぱりアプリの懸賞は嘘くさかったんだね」
清原　「うまい話はないなあ」
めぐみ　「それも？」
るり　「財力です」

るり　「めぐみが悲しむのは嫌ですし、清原さんも会いたがっているようでしたので」
清原　「おおん」
るり　「でも清原さん、めぐみとの連絡手段を絶たれたじゃないですか」
清原　「そりゃ、だって苦しいし」

るり　「じゃあ、もうこうでもしないと、会わせられないじゃないですか」

るり　「財力で」
清原　「財力万能だな」
るり　「はい！　わりと！」

るり　「じゃあ、わたしたちはここで、ね（神田に）」

清原　「どこ行くんだよ」
るり　「どこと仰いましても」
清原　「どうすんだよこれ（この状況）」
めぐみ　「そうだよ。戻してよ（垣根）」
るり　「ぷっ。戻せません」
めぐみ　「え」
るり　「（ひとしきり笑って）一度開いたら、戻せません」
めぐみ　「うっそ」
清原　「まじかよ」

清原とめぐみ、閉じている垣根に駆け寄る。
清原とめぐみ、垣根を戻そうとする。

清原　「これ……全然掴むところがねえ」
めぐみ　「しかも死ぬほど重い」
清原　「ふぬぬぬぬぬ」
めぐみ　「ふぬぬぬぬぬ」
清原　「同時に勢い付けて行くぞ」
めぐみ　「分かった」
清原　「せーっ」
清・め　「のっ」
るり　「おおおお！　共同作業ですね！　なんとまあ！」
清原　「（引きながら）何言ってんだ」
めぐみ　「るりぃい」

清原　「だめだ、動かん」
るり　「そうなんです。動かないんですよ！」
めぐみ　「なんで嬉しそうなのよ」
るり　「戻すときの取っ手のことを、完全に失念していまして」
清原　「えええ、じゃあどうすんだよ」
るり　「それは……おそらく、また工事をして一度取り壊すか」
清原　「いや、垣根じゃなくてさ」
るり　「財力で。え？　はい？」
清原　「今。この空気」
めぐみ　「そ、そうだそうだよ！　どう収拾つけるの」
るり　「それは……ねえ？」

るり、神田を見る。

神田　「へ？」
るり　「めぐみと清原さん、お二人で話し合ってください」

めぐみと清原、目が合う。

清・め　「いやいやいや」
清原　「冗談きついよ、それは」
めぐみ　「うん、それはさすがにねえ」
清原　「さすがにそれはダメですよ、ねえ」
めぐみ　「ねえ、えぐいですよ」
るり　「ほら、もう息ぴったりじゃないですか」

るり　「それに、ここで会ったのも何かの縁ですし」
清・め　「縁て！」
るり　「はい、息ぴったり！」
めぐみ　「だって、話すって何話すの」
るり　「それは、わたしよりめぐみが知っているんじゃないですか」
めぐみ　「え」
るり　「ね？」

るり　「じゃあ、神田くん、行きましょうか」
神田　「ぼく？」
るり　「はい」
神田　「行くって、どこに」

るり、考えて

るり　「お散歩？」
神田　「……！　ああ～」
るり　「それではあとはお二人さん、どうぞ、ごゆるりと」
めぐみ　「うそ、まじで？」

るり、一礼して出ていく。

神田も後に続いて出ていく。

めぐみ　「ちょっとちょっと」
清原　「リュウ！」

清原、神田に縋る。
神田、清原の手を優しく振り解いて

神田　「じゃあ、またあとでね。グッドラック（親指）」
清原　「正気ですか！」
めぐみ　「るりいいい！」

S、戸の閉まる音
清原とめぐみ、残る。

○清原とめぐみ

清原　「まじかよ……行っちゃったよ」
めぐみ　「行っちゃったね」
清原　「ああ……」

清原、めぐみ、改めて湯に浸かり直す。

めぐみ　「るり、お節介だよね、お嬢様なのに」
清原　「お嬢様だから、お節介なんじゃないの」
めぐみ　「あーね」
清原　「お嬢様どころじゃないか、この財力」
めぐみ　「この仕掛け、全部やったわけでしょ？」
清原　「っぽいね」
めぐみ　「まんまとやられたね」
清原　「な」
めぐみ　「でも、そこまで考えてくれてるってことなのかな、ウチらのこと」
清原　「荷が重いよ」
めぐみ　「まあ、ね」

清原　「なんか変な感じだな、あるものがないと」

めぐみ　「そうだね。一緒に住んでるときも、一緒に入ったことなんかなかったしね」
清原　「それな」

めぐみ　「なんで毛ぇ、取ってくれなかったの」
清原　「……ん？」
めぐみ　「排水溝の」
清原　「取ったじゃん」
めぐみ　「なかなか取ってくれなかった」
清原　「そうだっけ」
めぐみ　「そうだよ」

めぐみ　「なんで」
清原　「なんでだっけ」
めぐみ　「なんでよ」
清原　「ちゃんと取ってたから、覚えてないな。取ってなかった頃のこと」
めぐみ　「あ、そう」
清原　「靴下も。脱いだだろ」
めぐみ　「そうだね」

清原　「おれが、子どもだったんかな」
めぐみ　「なに」
清原　「一緒に生活するのつらいなって、思ってたからさ」
めぐみ　「ああ」
清原　「好きなんだけどさ、なんか、厳しかったんだよ」
めぐみ　「あーね」
清原　「子どもだった？」
めぐみ　「んなことないんじゃない？」
清原　「そう？」
めぐみ　「だって、わたしも今無理だもん」
清原　「……え？」
めぐみ　「同棲？　てか、一緒に住む？　好きだけど、潤のことは」
清原　「なんで？　無理なの？」
めぐみ　「え、なに、一緒住みたいの？」
清原　「いや、そういうわけじゃないけど」
めぐみ　「なんだ」

清原　「え、住みたいの？」
めぐみ　「そういうわけじゃないけど」
清原　「なんで」
めぐみ　「潤に限らないよ。誰かと住むって、今は考えられないかな」
清原　「あー」
めぐみ　「ですよ」

清原　「仲、いいんだね、北原と」
めぐみ　「まあ、うん。職場では一番、かな」
清原　「そうなんだ」
めぐみ　「あんたも仲いいんでしょ？」
清原　「おれはそんなことないよ」
めぐみ　「でもわたしに黙って知り合ってたんでしょ？」
清原　「だって、知ってるなんって知らなかったし」
めぐみ　「ふうん。で、なに、二人はデキてるの？」
清原　「は？」
めぐみ　「やった？」
清原　「はあ？　中学生かよ」
めぐみ　「どうなんだ」
清原　「やってないよ、やるわけないだろ。ご飯食べに行っただけ」
めぐみ　「ああ、そう。西麻布に焼肉ね」
清原　「なんだよ」
めぐみ　「別に」
清原　「おれが出したんだよ」
めぐみ　「へえ、わたしには全然そんなことしてくれなかったのに」
清原　「そんなこたないだろ」
めぐみ　「気があったの？　北原に」
清原　「ないよ」
めぐみ　「ないのに奢るんだ」
清原　「そりゃ、男と女がご飯に行けば、男が出すだろ」
めぐみ　「あ〜あ、やだやだ、そういう前時代的な考え」
清原　「なんだよそれ」

めぐみ　「さっきるりが言ってたこと、ホント？」
清原　「ああ？」
めぐみ　「わたしと別れて、後悔した？　って」

清原　「……」
めぐみ　「ねえ」
清原　「おまえも、あれ本当か」
めぐみ　「逸らさないでよ」
清原　「好きな人がいるって」
めぐみ　「……」
清原　「ほら黙る！」
めぐみ　「分からない」
清原　「……ん？」
めぐみ　「好き、って、いうか、気の迷い、的な気もするし」
清原　「おいおいおい、勘弁してくれえい。24にもなって」
めぐみ　「なんでそんなこと言われないといけないのよ」
清原　「相手、誰なの」
めぐみ　「え～」
清原　「言えよ」
めぐみ　「知ってどうするの」
清原　「知ってどうするのか知ってどうするんだよ」
めぐみ　「ハラタツ～」
清原　「ね」
めぐみ　「ねって」

めぐみ　「そういうやつだったよ、きみは」
清原　「だから、素直に言えばいいんだって」
めぐみ　「言っても知らないと思うよ」
清原　「百も承知」
めぐみ　「職場の、後輩」
清原　「ってことは……新卒？」
めぐみ　「……そう」
清原　「まじかよ！！　え、なに、ドユコト」
めぐみ　「潤に振られた直後にさ、新歓があって」
清原　「はあ」
めぐみ　「もう、べろんべろんに酔ったのよね」
清原　「わあ、タチ悪いな。新歓で先輩が悪酔いって」
めぐみ　「おまえのせいだからな」
清原　「責任転嫁だ」
めぐみ　「おまえのせいだ」

清原　「それで、どうしたの」
めぐみ　「新しく入った男の子に、介抱してもらって」
清原　「そんなに酔ってたの？　……あれ？」
めぐみ　「家まで送ってくれたの」
清原　「……」
めぐみ　「なんか、わたし寂しかったのもあってさあ、その、その人の優しさみたいなのがすごいこう……沁みちゃってさあ、もうギューーーンって来ちゃった。心に、ギューンって」
清原　「それで……」
めぐみ　「家で、わたし、なんかもう、すごい覚えてないんだけどさ、キスしちゃったみたいで」
清原　「うん」
めぐみ　「だからなんだろ、好きっていうか……好きなのかよく分からないよね。つらいときに優しくされたから」
清原　「神田瑛二」
めぐみ　「そう、神田瑛二くんていうんだけどね。可愛い顔してんだよ、ちょっとあの、神原竜に似てて、『東京レバニラ娘』の。あ、見てる」
清原　「見てるよ。たまに」
めぐみ　「あれおもしろいよね。第３話『この秋田シルクポークにはあなたの秋田への思いが籠っています。わたしの舌は誤魔化せません』」
めぐみ　「……え、なんで」
清原　「なんでって、豚肉食ったら銘柄が分かるっていう設定だろ」
めぐみ　「え、どういうこと」
清原　「いや、ドラマだから、そんなこと言われても」
めぐみ　「いや、そうじゃなくてさ、なんで神田瑛二って知ってるの」
清原　「遅い！」
めぐみ　「神田瑛二って。……え、あ、あああああ、秋尾市役所に来てたから？だから知ってるの？」
清原　「いや違う違う違う」
めぐみ　「え、あ、じゃあ、るりから聞いた？」
清原　「聞いてない聞いてない」
めぐみ　「どこから情報が洩れているんだ！」
清原　「さっき自分で言うてたよ」
めぐみ　「え、なに、なに、『どこから情報が洩れているんだ』」
清原　「もっと、もっと前」

めぐみ　「え、なになに。『この秋田シルクポークには』」
清原　「もっと前だって！」
めぐみ　「はああ〜〜？」
清原　「ほら、瑛二くんが誰かに似てるって」
めぐみ　「似てる……？」

めぐみ　「神原竜？」

めぐみ　「ああああああああああああああああああ」
清原　「そうそう」
めぐみ　「あ、分かんないわ」
清原　「なんだよ！」
めぐみ　「神原竜でしょ？　神田くんとなに？　なんか」

めぐみ　「ああああああああああああああああああああ」
清原　「お、わかった？」
めぐみ　「神原竜……本名」
清原　「そうそう」
めぐみ　「神田！　るりが言ってた！　ってかさっきまでいた」

めぐみ　「弟かあああああああああああああああああああ」
清原　「ベストアンサー出ましたね」
めぐみ　「ああああああああああああああああああああ」
清原　「世間は狭いねえ」
めぐみ　「神原竜の弟なら意地でもものにするんだった」
清原　「あ、でも恋人いるって」
めぐみ　「え」
清原　「リュウが言ってた」
めぐみ　「ああああああああああああああああああああ（下に沈む）」
清原　「残念でした」
めぐみ　「ああああああああああああああああああああ」

清原　「好きだった？」
めぐみ　「まさか」
清原　「そうかい」
めぐみ　「なに」

清原　「別に」
めぐみ　「好きなの？」
清原　「誰を」
めぐみ　「わたしのこと」
清原　「今？」
めぐみ　「うん。っていうか、今も？」
清原　「……」
めぐみ　「答えてみろよ」
清原　「いや、なんつうかさ……情？」
めぐみ　「は」
清原　「が、湧いているんだと思う」
めぐみ　「情？」
清原　「ああ」
めぐみ　「何、情って」
清原　「愛情の、情だろ」
めぐみ　「愛ってこと？」
清原　「そ～う～な～のか～もしれない」
めぐみ　「まじかよ」
清原　「ただもし、神田瑛二くんの方が好きなら、それはそれでいいと思うんだ」
めぐみ　「なにキモ。急に」
清原　「好きって言っただろ。キスもしたんだし」
めぐみ　「それはだって、え～、酔ってたから。しかも彼女いるんでしょ？」
清原　「おう」
めぐみ　「誰？」
清原　「それは知らねえけど」
めぐみ　「ふうん。ま、恋人いる人を好きになってもねえ」
清原　「なっても？」
めぐみ　「意味ない」
清原　「ああ～」
めぐみ　「素っ気ねえなあ」
清原　「恋人がいるとかいないとか、関係なくね」
めぐみ　「おっ？」
清原　「恋人がいるくらいで諦められるなら、それは恋ではない」
めぐみ　「一理あるか」
清原　「だろ？」

めぐみ　「一理な、一理。わたしと付き合ってたときも、それくらい情熱的でおれよ」
清原　「おったわ」
めぐみ　「そうか？」
清原　「そうだろ」
めぐみ　「ユネッサン、19歳が盛りだとか言いやがってよ」
清原　「うわ（両手で両腕）、掘り返すねえ。けっこう深めに」
めぐみ　「根に持ってないけど」
清原　「根に持ってるやつが言うやつだ」
めぐみ　「あのとき21歳だったんだよ、わたしは」
清原　「冗談だよ、冗談」
めぐみ　「なんだよ冗談て！」
清原　「冗談だろうが！」
めぐみ　「意味分からない」
清原　「21歳に向かって19歳が盛り、なんて冗談以外で言わないだろ！」
めぐみ　「はあ？　どの口が言ってんだ！？」
清原　「その口だ、その口」
めぐみ　「ふざけんなおら！」
清原　「ふざけてなんかねえよ」
めぐみ　「冗談だったんだろ、ふざけてるじゃねえか！」
清原　「何言ってんだオラ」

と、イチャイチャする。

○４人（エンディング）

M『私がオバさんになっても』

めぐみ　「は！？　何これ、何これ」
清原　「おれに聞くなよ！」
めぐみ　「るり！　ちょっと何歌って」

S、戸の開く音

るり♪　「（1サビ途中）私がオバさんになっても　本当に変わらない？
とても心配だわ　あなたが　若い子が好きだから」

るり、やってくる。

るり　「北原るり、『私がオバさんになっても』２番を歌います～」
めぐみ　「るり！　私がオバさんになっても、じゃないよ」

るり♪　「そんな話はバカげてる　あなたは言うけど
女ざかりは19だと　あなたが言ったのよ」
清原　「やかましいわ！」
るり♪　「だけど何食わぬ顔で　私を見つめて
あれは冗談だったと　ＫＩＳＳをした」
めぐみ　「してないわ！」
るり　「ご一緒に！」
めぐみ　「なんでよ！」

るり♪　「私がオバさんになっても」
めぐ♪　「ディスコに連れてくの？」
清原　「連れていくよ！」
るり♪　「ミニスカートはとてもムリよ　若い子には負けるわ」
清原　「負けねえよ！」
めぐ♪　「私がオバさんになっても　ドライブしてくれる？」
清原　「するよ！」
二人♪　「オープンカーの屋根はずして　かっこよく走ってよ」
清原　「屋根開かねえよ！」

るり　「ご清聴、ありがとうございました」
清原　「なんだよこれ！」

清原　「何歌ってんだよ！」
めぐみ　「分からない、勝手に体が」
清原　「魔法かよ！」
るり　「めぐみ」
めぐみ　「……なによ」
るり　「答えは、出ましたか？」
めぐみ　「答えって」
るり　「清原さんとの」

清原　「おれ！？」

清原とめぐみ、見合う。

めぐみ　「まずはお友達からリスタート」

めぐみ、手を出す。

清原、るりを見て助けを求める。

清原　「北原ぁ」

るり、首を振ってそっぽを向く。

清原、分かったよ、という感じでめぐみの手を取る。

るり、チラ見して

るり　「（満足気に）素直じゃないんですから」

清原とめぐみ、気恥ずかしくなって手を離す。

清原　「ってか、リュウはどうしたんだよ！」

M『悪魔がにくい』

めぐみ　「また曲！」

S、戸の開く音

神田、和装で現れる。マイクを持っている。

清原　「リュウ！」

神田　「神原竜、『悪魔がにくい』歌います！」

るり、拍手をする。

神田、歌いかける。

るり♪　「おまえが好きさ好きなんだ」

めぐみ　「おまえが歌うんかい」

たまらなく好きなんだ

清原　「誰も歌わないんかい」
めぐみ　「もうなに～」

るり、拍手をしている。

神田　「どうも、ご清聴ありがとうございます」
清原　「おまえ歌ってないだろ。なんだこれ」
めぐみ　「え、二人、グルだったの？」
るり　「グルとは、人聞きが悪いですね」
清原　「あああ！　だからか！」
めぐみ　「なに？」
清原　「いや、垣根が壊れる前さ」
めぐみ　「うん」
清原　「おれは、めぐみを見たから、めぐみって分かったんだよ」
めぐみ　「うん」
清原　「でも、北原は」
るり　「神田竜一くん！」
清原　「って、見てもないのに分かったんだよ。そしたらリュウも」
神田　「北原るりさん！」

神田とるり、互いに接近する。

清原　「って」
めぐみ　「ああ」
清原　「中学の同級生って、普通声だけで分かる？」
めぐみ　「確かに。言われてみれば」

るりと神田、接近を解除し、見合わせて苦笑い。

るり　「やっちゃいました、ごめんなさい」
神田　「いいよ、しょうがない」
めぐみ　「なに、まだなんかあるの～？」
清原　「リュウ」

神田　「ごめんね潤。じつはぼくもこれに加担してたんだ」
清原　「どういうこと。……どこから？」
神田　「う～ん、最初から？」
清原　「……マジかよ。アプリも知ってた？」
神田　「うん」
清原　「Oh……」
めぐみ　「神田さんが関わってるって、え、なにどういうこと」
神田　「北原さん、ちゃんと説明しないとね」
るり　「そうですね。……めぐみ、わたし、実は好きな人がいます」
めぐみ　「えええええええええ！！」

めぐみ　「え、だって、恋はしたことがないって」
るり　「そうなんです。こんな思いは初めてで、だから、これが恋という感情なのかが分からなくて」
めぐみ　「え、待って、それで、え、なんで神田さん？」

めぐみ　「あ～～～！　神田さんのこと、好きなんだ。このこの～」
るり　「違います」
めぐみ　「ドテ～！」
るり　「でも、半分正解です」
めぐみ　「はい～？？？」
清原　「あ」
神田　「気付いた？」
清原　「たぶん」

めぐみ　「なに」
清原　「いや、なるほどと思って」
めぐみ　「なに一人だけわかったような顔して」
清原　「たぶん、めぐみの知ってる人だよ。ね？（るりに）」
るり　「さすがですね」
めぐみ　「はあああ？？」

めぐみ　「だって、神田さんじゃなくて、半分正解で……」

めぐみ　「ああああああああああああああああああああ！！」

めぐみ　「神田！　瑛二！」
るり　「ご明察です」
めぐみ　「出た！　また出た神田瑛二」
るり　「入ったときからとても気が利く優しい方だと思って、それで、新人歓迎会のとき」
めぐみ　「出た～！　わたしの黒歴史！（沈む）」
るり　「まさにその、めぐみを率先して介抱している彼を見て」
清原　「好きになった？」
るり　「分からないんです。経験がないから。でも、とても気になって。お食事に誘いました。西麻布の焼肉に」
めぐみ　「出た！　西麻布の焼肉！（起きる）」
神田　「鉄板だね」
るり　「いえ、焼肉です！」

るり　「そのときに、瑛二さんから、めぐみのことを聞いて。神田くんのこともそのときに知りました。瑛二さんのお兄さんだって」
神田　「それで、北原さんからぼくに連絡が来たんだ」

S　prrr音

るり　「あ、もしもし、神田くんですか……？」
神田　「え、北原さん？　びっくりした」
るり　「お久しぶりです」
神田　「本当に、お久しぶりだね。どうしたの」
るり　「実は、かくかくしかじかで、瑛二さんとお食事に参りまして」
神田　「（頷く）」
るり　「瑛二さんはわたしとめぐみと同じ職場で、そこに保険営業で清原さんが」
神田　「（頷く）」
るり　「めぐみはきっと、清原さんがまだ好きで～～」
神田　「（頷く）」
るり　「でも、めぐみは、瑛二さんでその気持ちに蓋をして」
神田　「（頷く）」
るり　「わたしは、……瑛二さんが気になっていて」
神田　「（頷く）」
るり　「神田くん、どうかわたしに手を貸していただけないでしょうか！」

神田　「え？」
るり　「みんなで幸せになるために」

清原　「みんなで幸せ？」
るり　「はい」

るり　「めぐみと清原さんに復縁してもらいたくて」
清原　「え？　なに、なんで？　どゆこと」
神田　「潤」
清原　「あ？」
神田　「めぐみさんと潤が復縁することが」
るり　「みんなが幸せになるための必要条件だと思いました」
清原　「……は？　なんだよそれ」
神田　「潤」

神田　「嫌だった？」
清原　「……」
神田　「潤、めぐみさんと別れてから、……明るくなったよね」
清原　「？　明るくなったんだから」
神田　「それが、無理にそうしてるように見えて、悲しかった」
清原　「リュウが？」
神田　「うん」
清原　「なんでだよ」
神田　「潤が悲しいのは、ぼくだって悲しいでしょ」

神田　「友達なんだから」

清原、神田・めぐみ・るりを見る。
３人は神田を見ている。
清原、溜息。

清原　「なんだよ。おれがバカみたいじゃん」

めぐみ　「そんなこと言わないで」

めぐみ　「わたしは嬉しかった。潤に会えて」

清原　「……」

めぐみ、清原に手を出す。

清原　「なに」
めぐみ　「友達」
清原　「へ」
めぐみ　「友達でしょ？」
清原　「は？」
めぐみ　「さっき、友達からリスタートしたでしょ！」

めぐみ、清原の手を掴む。

清原　「おまえ、それじゃ！（離そうとする）」
めぐみ　「いやなの？」
清原　「嫌じゃ……」

清原、話そうとする力を緩めていく。次第に強く握る。

めぐみ　「よろしい」

神田　「（るりに）やってよかった？」
るり　「はい！　二人が復縁できて、嬉しいです」
めぐみ　「ねえ、るり」
るり　「はい」
めぐみ　「これで、みんな幸せ？」
るり　「もちろんです！」
めぐみ　「あんたも？」
るり　「もちろんです！　わたしは心置きなく、瑛二さんを好きになります！」
めぐみ　「お、『好き』が分かった？」
るり　「分からないです！」
神田　「あらら」
るり　「したことないので、恋。どんな気持ちが恋なのか、知りたくて。皆さんが喜び、悲しみ、希望を持ったり絶望したり、そんなとっても不思議なものの正体を知りたいんです。わたしの幸せは、その気持ちが

分かること、です。瑛二さんへのこの気持ちは」
清原　「でもさ、そこまで瑛二くんのことを思って仕組んだわけでしょ？　こんな壮大なことを。一から、北原が考えて」
るり　「まあ、はい」
清原　「ってことは、もうそれ好きってことなんじゃないの？」

一同、黙る。

清原　「なんだよ」
めぐみ　「いや、確かにと思って」
るり　「（感動している）……」

3人、るりを見る。

めぐみ　「感動している」
るり　「これが、好き。これが、恋なのですか……」
めぐみ　「さあ、たぶん？」
るり　「この、なんだかわからないぽよぽよした気持ちが、恋……」
めぐみ　「だといいね！」
るり　「嬉しいです！　わたし、嬉しいです！」
めぐみ　「お～良かった良かった」
清原　「あ、でも」
めぐみ　「なに！」
清原　「（神田に）ちょっと」

清原、神田に耳打ち。

神田　「言ってない……。たぶん瑛二も言ってないと思う」

神田、青くなっていく。

めぐみ　「なに？　え、なに？」
清原　「北原」
るり　「な、なんですか……」
めぐみ　「瑛二くんに彼女がいること？」

清原、神田、（言っちゃったよ！！！）の顔。
るり、きょとんとしている。

めぐみ　「あ、これもしかして」
清原　「あ、あああああ、でも、それは分からないし」
めぐみ　「ごめーーーーん！！」
神田　「そうそう、瑛二の妄想って（可能性もあるし）」
るり　「大丈夫ですよ！」
清・神　「へ？」
るり　「お付き合いしている方がいても、わたしは、負けません」

めぐみ　「財力で？」
るり　「（遮って）財力は関係ありません」

るり　「わたしの魅力で、落としてみせます（セクシーポーズ）」

3人、微笑ましく見つめ合って

3人　「逞しい～」

すっかり打ち解けた4人ですが
るりちゃんの恋のお話は、またいつか――

終わり